らもありませう、然し私は女であるから、君をおきて男はない、君をおきて夫はない、どうぞ逃げずにおやめ下さいまし

二人で仲よく暮しませう

と、否之れ處でない、もつと強い意味の歌をお歌ひになつたので仲直りが出來たとか。薄の話が飛んだ横道へそれたから又元へもどる。

薄は古代から屋根を葺く料とし使はれてゐる、山村の茅屋は非常に趣味のあるもので、殊に薄の穗が白く靡いてゐる中に、一軒の農家があつて、軒端には柿の葉が紅葉して、金色の果實が秋の夕日に照され、後の雜木林には蜩が鳴いて居る等は丹波等に多い景色であるが、自分は之れが純日本的の風景であらうと思ふ。

晩秋の野は實に荒涼たるものである、稻田は刈られ、美しかつた花も枯れ、落葉樹の葉は落ち盡して、鳴く虫の音も何となく憐れに聞える、梢を鳴らす木枯の風が、蕭々として尾花の上を渡る時、ああ此時こそ眞に淋しみを感ずる時である。（九月十五日）

日本水彩畫會新會友

徳島縣川島町八七〇　中高一

福岡縣柳川町瀨高町二九　富安道義

靜岡縣富士郡大宮町　石井眞峯

寄書

飯山素絢畫會記錄抄錄

明治四十年五月五日同志二三と語らひ水彩畫の研究を目的とし**スケツチ**會なるものを組織し、同日森本香谷氏の寓居に於て發會式を擧行せり、爾來入會者續々申込ありしを以て、研究所を飯山中學校圖畫室に移し、左の內規を定めたり

一會員、中學生の入會者にありては三學年以上の者たるべきこと

一會期、每月第一、第二日曜日に開會し午前は主として靜物の寫生をなし、午後は郊外の寫生とし、隨時作品の互評會を開くこと

以上の各項を議定し、次て幹事の互撰を行へしに、岡登貞治、石田次郎の二氏當撰せり、同日入江木堂氏の撰定を請ひ、會名を素絢と命ず。

同年九月廿七日より二日間、本部教育品展覽會開催を機とし、會員の作品八十余點を陳列し、こゝに第一回繪畫展覽會を開きたり。

四十一年三月廿五日、幹事岡登貞治氏は美術學校に、同石田次郎氏は早稻田にいつれも入學上京に付、本會外部會員とし、市川淨、小林重治の二氏代て幹事に就任す。

同年五月三日、本會創立一周年紀念會を圖畫室に開き、內外會員の作品四十八點、參考として丸山晩霞氏の作品數點を陳列し來賓の觀覽に供せり。

同年七月廿日より五日間、信美會と聯合繪畫展覽會を、飯山小學校に開催せり。出品畫は大下、丸山、河合諸氏の水彩畫十數點、信美會員の作品水彩畫四十一點、日本畫二十點、本會員の作品六十三點を陳列せり。

四十二年三月廿日、幹事市川淨、同小林重治の二氏いつれも上京に付、本會外部會員に列し、宮本奬、岩上行秀の二氏代て幹事に就任す。

同年十月一日、日本水彩畫會本部との交渉就り、飯山支部設置の報に接せしを以て直に內外會員に此旨を報告す。

以上本會沿革の概要とす、之を要するに、本會は嚴整なる規約を設けす、極めて平易なる同趣味の團體なれば、常に和氣靄然たるものあり、展覽會其他諸雜費の如きは、主幹に於て其大部を負擔し、其他は、作品の賣却代、或は寄贈金等を以て之を支辨せり、目下會員は、內部會員二十二名、外部會員十名、いつれも研讃に怠らず、其成績の如きも漸次見るべきものあり。

（支部委員報告）

イツタ、カツタ、ダツタ集（鎌倉）

阿彌陀生

痛み入つたのは

△小島烏水先生のわざ〳〵御來遊の上、貴重な御話をして下さつて、また其上に御土產を澤山戴いたこと

△三條公爵は夫人と共に二度迄も會場へ御出下さつたこと

△『オヤ此書物は起つたり座つたりして輪廓をとつたのですか』『このビール壜はツヤケシにしましたれ』ナンテ先生の皮肉的御批評

お可笑かつたのは

△小林君の踴り、あの低い圓い身體を一層低くして腹の顏をいろ〳〵に表情姿勢をとらせた御手際

△丸屋の前で鎌倉ッ子と田舍ッ子との喧嘩『ヤイこの肥取りの田舍ッペイ、來られるならコヽ迄來て見ろ』『何んだコノ餓鬼共！テメィ達は石イ持つてゐるから危ないから往かないんだぞ』一方が勇を鼓して進むと一方は逃出す、また盛り返す

欲しかつたのは

△兩先生の御作一枚宛

△由井ヶ濱で照つけられた時、氷水一杯

恐入つたのは

△透視畫法の違つた建物を描いて一寸先生に强情を張り、それならゝ實地に比例をとつて御話されて成程！

△會員某氏の大天狗、多分御自身でも覺えがありませうれ

嬉しかつたのは

△ドーにもコーにも仕末が出來ずテコズッて困つてゐる時、靴の音がして先生の來た時

△先生達の快活であつたこと

△いよ〳〵紛失と思つた大切の先の切れた筆の出たとき

悲しかつたのは